50

シュヴァイツァーに捧ぐ（没後50年記念）シュヴァイツァーに宿るゲーテの生への想い

鈴木　重統
北海道大学医療技術短期大学部

（目的）シュヴァイツァーがアフリカのランパネラで逝去されてから，50年になる．彼の生涯は，医療が限りなく進歩してゆくなか，かえって生きるとは何かという根本を問い直さざるを得ないような時代の私たちに，時代を超えて見失ってはいけないものを再確認させてくれるように思われるので彼が影響をうけたといわれるゲーテの作品と彼の生涯を探究することによりシュヴァイツァーの生命観の背景に迫ることを目的とした．

（方法）シュヴァイツァー（1875～1965）はゲーテ（1749～1832）をわが師と呼んでいるが二人の生きた時代も異なり，実際に授業をうけたり，その謦咳に接したりしたことはない．その時空を超えた接点として①シュヴァイツァーが，医師を志した最初の動機②シュヴァイツァーがゲーテ賞を受けていること③ゲーテの作品のなかにシュヴァイツァーに影響を与えたものを検索した．

（結果）

①シュヴァイツアーの記述によれば，彼が医師を志したのは友人がきっかけであった．ゲーテもその友人がハルツの山奥でうつ病で療養しているときに見舞ったのがきっかけで当時は精神科の医師になろうと志望したし，その後何か友人のために尽力しなければならないことが生じたときには「これはお前のハルツ旅行だ」といって自らを鼓舞したという．

②ゲーテ賞をうけた記念講演（1928）では，Sturm und Drang（疾風怒涛）の時代に思いをはせてドイツの文明のさらなる発展をねがい，18世紀の偉大な人間性理想の実現を期することが重要であるとした．またアメリカにおいて第二次世界大戦後ゲーテについての特別講演（1949）を行い，人間性の褒失の危機に瀕する時代（当時）において「Edel sei der Mensch. Hilfreich und gut!」（人は気高くあれ．慈悲深く善良であれ．）というゲーテの詩を引用して戦後の荒廃した時代にヒューマニズムの重要性を説いた．

③中世のヨーロッパにおいて，伝染病の流行によるおびただしい死者の増加のためか，キリスト教の教えは「死を思え」（Memento mori）であったが，ゲーテは「ウイルヘルム・マイスターの修行時代」では「生きることを思え」（Gedenke zu leben）と述べている．彼の考えとは裏腹にこの作品のなかでは，若い貴族に捨てられた女優アウレーリエ，主人公の子を生んで世を去る初恋の女性マリアーネなどが次々と死んでゆく．しかし，彼はウイルヘルム・マイスターを外科医にし，「生命への畏敬」「生を想え」という彼の信念を揺るぎないものとした．

（考案・結論）充実した生を送った魂は不滅であって，死後もなんらかの形で存在し続けるというゲーテの生命観・医学観を代表するものは「ファウスト」であるが，シュヴァイツァーの生涯のなか，彼の生き方のなかにゲーテの作品をみることができるのもまた事実であろう．

「わが生命と思想」などで彼の人生の転機，ストラスブルク大学の神学の教授すなわち牧師という職にありながら同大学で30歳を過ぎてから医学を学ぶ決心をし，アフリカのランパレネで病院を開こうとしたとき彼の傍らにはいつもゲーテがいて激励したような気がしたと記述している．赤道直下のアフリカで黒人のために医師として働き生涯を捧げたシュヴァイツァーの生き方は，「ウィルヘルムマイスターの修行時代」そのものであり，「生を想え」から「生を救え」を実行した本人であったように思われる．